



善正寺だより

掲示板法話

知らぬ間に歳をとり思わぬ病気で死んでゆく

これは逃げも隠れもできぬ我が事です



暑い夏がようやく盛りを過ぎた頃、熱心に仏法聴聞に励まれた「門徒さん」が急逝されました。夏の永代経にお参り下さったばかりでしたので、訃報に耳を疑いました。顔色は元氣そうに見えてもお身体の中では衰弱、病気が進んでいたのでしょうか？

ふと晩年、亡父が詠んだ「こんな私に」という詩を思い出しました。

何も知らずに生まれ出て
知らぬ間に 歳をとり
思わぬ病気で死んでゆく
人の一生 この道は
逃げも隠れもできぬ道
こんな私が 救われて
お慈悲喜び 南無阿彌陀仏
「ご恩知らされ ありがとう
明るい笑顔で 励みゆく
念仏の道 永遠の旅

亡父が編んだ「法悦の歌」の中の一つですので、従来から知ってはいましたが、じっくり味わう気持ちになったのはIさんの急逝であり、亡父の還相の働きかもしれません。「何も知らず

〒:512-0902
三重県四日市市
小杉町1014
浄土真宗
本願寺派
善正寺
☎:059-331-1670
fax:059-332-0733

に生まれ出て 知らぬ間に歳をとり」とは我が事です。仕事が大事、子供の養育が大事と過ごしている間に年齢を重ね、何でも「知ってるつもり」ですが、我が人生の時間が段々短くなっていることには中々気づきませんでした。「自分はまだまだ元気だ」と「独生独死独去独来」という無常の身を顧みることもしず、後生の「大事」の解決は後回しで、「評論家三昧」で馬鹿を重ねる。この愚かさ気づかせて頂くのは「他人事でない、うかうか過ごしておれぬ」という自覚であり、それは真剣な聴聞により感性を養われる外ありません。安易に「念仏しておれば救われるのだろう」と評論し、横着しているのは、「空しく過ぎてゆく」我が身知らずの極みでしょう。

東大阪市で商店を営んでおられた榎本栄一さんは「念仏を申せば、この愚昧な眼が開き、自分の煩惱が見え始める。ここからがたじけなく」と言われ、「私の煩惱の渦の底には、自分が見えない仏が毎日ましまし、毎日智慧の光を頂く」と、悪を転じて念仏の善

☆行事ご案内

◆門信徒会10月例会

10月21日(日)夜7時半



- ①親鸞聖人報恩講を迎えるに当たり；その意義と準備
- ②和讃の心を味わう；恩徳讃その他・・・。

◇絵手紙教室10月9日(火)午前10時庫裏食堂、小杉郵便局、百五銀行門徒展にも出品。下手でいい、下手がいい、初心者歓迎

◇キッズサンガ10月6日(土)午後4時鐘撞きは毎日夕方5時、

◇『報恩講』11月2日午後、3日午前、午後(三全仏婦主催)講師：守(もり)快信先生(滋賀)お非時は2日の午前11時より12時までご遠慮なくどうぞお召し上がり下さい！

◇三重組コーラス、11/22本山御堂演奏会バス参加16回目

◇善正寺ホームページ「三重 善正寺」で検索。1年分の寺報閲覧。毎日更新ブログ「住職と坊守のつれづれ日記」好評。開設10年2カ月で27万5千訪問、一日平均75人程、悩み相談、大歓迎！即返信

◇一縁会テレホン法話 Ⅱ 059-354-1454お電話下さい
3分間で法話が流れます、週替わりで三重組5か寺の住職、坊守、若院が担当。新刊本『参らせてもらうでね』(自照社刊)発売中

◇新納骨堂：後継者の無い方、お墓でお困りの方ご相談下さい

◇法事の場所でお困りの方；本堂使用可。寺にご相談下さい。

と一味となる人生に転換されてゆく尊さを教えてくださいます。

亡父は晩年、腸閉塞という「思わぬ病氣」になり、人工肛門を装着する身に苦しみました。医者からそのことを告げられた時の寂しそうな顔が目に残ります。ストレスの多い生活、単身赴任の不規則な食習慣も影響したでしょうが、「逃げも隠れもできぬ」厳しい現実を受け止めて、「妄念昔に変わらねど、身は本願の中にあり。有難いですが、南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏」とうわごとのように語り、我が遺言となりました。「心は浄土に遊ぶ」がことき老いの姿は、必ずいつか

写真アラカルト



大遠忌法要立華寄進の伊崎さん兄弟(故人)



「我が事となる」のだと知らされる仏縁だったので。

坊守スケッチ 『娘たちよ』

「仏法広まれ」を信条とする鹿児島県出身の法友のお導きで、隠れ念仏に興味を持ちました。江戸時代の薩摩藩主は「浄土真宗の教えと信者の結束力が、封建体制にそぐわず統一を妨げる」と、300年間に渡って念仏を弾圧して禁止しました。幕末には「二本尊」千幅廻分、門徒は14万人以上が殉教した悲話があります。鹿児島別院境内には、疑いのある信者に自白を迫った重い石が設置され、勸学の梅原真隆和上の歌「なみだ石 涙にぬれて もだし

とき」が刻まれていきます。極度の貧困に堪え、自らの信仰を捨てず、信仰の仲間を裏切らずに、殉教していった尊い命を想う時、心が震えて痛みます。

ところで私が一番好きな仏教讃歌は米村竜治作詞の『娘たちよ』です。米村先生は筑紫学園教授で隠れ念仏の研究者です。紙面の都合で一番の歌詞だけ紹介します。「娘たちよ 人生には旅立ちの時がある 重い荷を背負いながら独りゆく時が 辛くてもそのままに 掌を合わせ掌を合わせみ光のその中に歩いて行こう 母の背に負われて聞いた 幼な日の歌が 心にほのぼのとよみがえるまで」この歌は息子の結婚式でも全員で歌い、三重組コーラスの十八番で、京都の御堂演奏会で何度も歌いました。若者達にどんな逆境にも立ち向か

い、仏様のみ光を信じて力強く生き抜こうというメッセージが伝わります。歌詞の最後の部分には、母の愛情の温もりと優しさが込められています。

江戸時代は念仏の弾圧と禁止の暗い歴史でも、戦後は信教の自由が認められて有難い時代。しかしそれにも拘わらず、「先祖が命がけで守り通して下さったみ教えの縁が、スタスタに切られて若い世代に全く伝わらないのが現実です。モノが溢れ便利になった反面、お力ネ優先で心の教育を置きざりにした結果です。『娘たちよ』は、現代人の渴き切った心に、お慈悲の温もりと潤いを与えてくれます。私はこの歌を通して若い人々に、み光に出遇えた喜びを伝えたいと思います。



寄稿 四日市 釈妙水
水着跡くつきり焼けて園児かな
開けた本めくる暇なく昼寝かな
ためらわず冷房使えとラジオかな
甲子園汗と涙が光るなり
甲子園健闘讃う虹の橋
甲子園健闘讃う虹の橋 釋清風
打水やゆらり一蝶飛び立てり
手花火の幼なにいと父の手や
山百合の野道に生まれりんりんと
行く夏や昭和はいよいよ遠くなり



☆若院夫婦の『育自な毎日』その46
8月末、私の母方の祖母が86歳で亡くなりました。誕生日は私と同じですが歳の差は50歳上。私の子供達にとっては、4世代前の曾祖母です。
葬儀の会場が伊勢で、子供達を連れていける昼間の葬儀・告別式だけに参列しました。猛暑が続いた為、通夜、葬儀に先立って茶毘に付されました。祖母の遺体を拝むことができずに残念でしたが、生前の面影を偲んで式に臨みました。子どもたちにとって初めての葬儀参列でしたが、雰囲気すぐに溶け込んで、神妙な面持ちで行儀よくしてくれました。

葬儀場に着くと祖父や母が出迎えてくれ、久しぶりに会う従兄弟はそれぞれに母親、父親になっていて時の流れを感じました。従妹とは昨年の夏にも伊勢の祖父宅で会って以来一年ぶりの再会。いとこの娘(2歳)は、物怖じせず私の子どもたちに近づいてニコニコ顔。長男(6)と長女(3)も小さい子には優しく、子供同士の交流に心が和みました。
祖母は手に職をもち、随分頑張って手広く仕事をこなし、後輩の方々から尊敬される存在でした。祖母から聞いた苦労話や体験談は何かしら感動して、私の心の糧にもなっています。

残された祖父は、子供達の写真を郵送する度にお礼の電話をくれて、毎月「善正寺だより」の愛読者。今月も、これを読んでどんな感想をくれるか

楽しみです。今回は寂しい話でしたが、今後ともよろしくお育て下さいませ。

報告

★伊崎顕次様(86歳9月2日往生、
東阿倉川)合葬

お知らせ

※『第8回善正寺門徒展』が10月の1カ月間、百五銀行阿倉川支店で開催。門徒さん以外の作品もあり。11月2・3日の報恩講本堂にも展示します。※本堂の立華衆として故伊崎栄一様とご報告下さった伊崎顕次様のご逝去。5か月前に旅立たれた兄上の永代経お経開きに参詣。2週間後の突然の訃報に驚くばかり。兄弟と親戚の方で2年前のご法要に見事な立華を奉納。もう二度と立派な立華は見られませぬ。毎回百五の門徒展にも伊勢型紙で出展。秋には庫裏玄関先に菊の鉢植えを献納。本堂で熱心に「聴聞のお姿」を謹んでお悔やみ・お念仏申し上げます。
カンパありがとうございます!
澤田美智江様、服部邦子様よりお志、葉書等頂きました。感謝致します。

☆ 編集子より ☆

「善正寺だより」298号をお届けします。◇猛暑、台風、豪雨など災害相次ぐ日本列島。世界各地でも異常気象、大災害頻発。◇温暖化は現代文明のもたらす地球の病理現象ではないか? ◇我々はこの病理現象から免れ得ない身、苦悩を背負いつつ生きる自覚を共有しなければと痛感◇共々に、空しく過ぎることなき歩みを進めたい。

今年のお盆に日本中が感動するニュースが飛び込んできました。山口県で2歳の男児が3日間行方不明。諦めていた矢先捜索に参加してわずか20分で尾畠春夫さん(78)によって救出されました。尾畠さんのボランティア活動の経歴を知るにつれて、多くの日本人が目からウロコ！自分の生き方を反省しました。尾畠さんは鮮魚店を営み、65歳から軽トラに食糧、水、寝袋を積みこんで無報酬で現地へ駆けつけます。「学歴もない自分が今まで生きてこれたのは世間のおかげ、これからは世の為人の為に恩返しをしたい！」ボランティアのきっかけは、徒歩で日本縦断の野宿をした際、南三陸町で地元民から差し出された混ぜご飯。その有難さが忘れられず、東日本大震災の時、恩返しがしたいと早く駆けつけました。この話を聞いて2500年前のお釈迦様とスジャータという少女の出会いを想像しました。スジャータがお釈迦様に乳粥を捧げたおかげで、難行苦行で瘦せ衰えたお釈迦様は生氣を取り戻しました。菩提樹の下で冥想に専念してついに悟りを開くことができました。尾畠さんの混ぜご飯もお釈迦様の乳粥に似ています。私達の人生の転換点は「人との出会い」と「気づき」ではないでしょうか？人生これからでも遅くない。自分の生き方を見直す出会いに積極的に参加しましょう。10月は1ヶ月間、百五銀行阿倉支店「善正寺開徒展」。11月2日3日は年間最大行事「報恩講」。皆様のご参詣をお待ち申し上げます。

合掌

平成三十年十月

善正寺坊守様